

木曾川



木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
今回は清流と森とダムの里・揖斐郡藤橋村を特集。
渓谷に点在する村の歴史と現状、
現在進行形の事業をクローズアップします。
また宝暦治水第二編では、その工事概要を追跡します。



INDEX

ふるさとの街・探訪記《藤橋村》

* 清流と森とダムの里・藤橋村

AREA REPORT

* 冠山より伊勢湾へ注ぐ121km

気ままにJOURNEY

* 時を置き去りにした昔がたりの里

歴史ドキュメント

* 苦難を極めた油島締切と大樽川洗堰

TALK&TALK

* 安藤萬壽男氏が語る宝暦治水

民話の小箱

* たるべの滝

清流と森とダムの里・藤橋村

揖斐川の渓谷に沿って点在する歴史ある家並み。
谷川に踊る銀色のせせらぎ。
かつて炭焼きの煙りたなびく山村は、
碧色の水面をみせるダムの子として再生。
「水とみどりに恵まれた真心の村のかよいあう
住み甲斐のある村」をめざして、
村の活性化に取り組んでいます。



藤橋村横山地区空撮



村の概要と地形

揖斐川渓谷の両岸に点在する藤橋村は、山林面積が九五%を占める山村。岐阜県の北西、揖斐郡の北部に位置し、西に天狗山など三国山系に属する高峰がめぐり、南は日坂峠を隔てて久瀬村に隣接、北は福井県との県境を若丸山、冠山などの千二百mを越える越美山脈が走っています。

その山脈の中央をほぼ北から南へ揖斐川の本流が流れ、坂内川をはじめ、親谷、尾蔵谷、矢中谷などの支流とともに、山地の奥深くを沖積地に、集落や耕地が点在しています。

揖斐川源流部にあたり、県下で最も降水量が多い地帯であることから、早くから西横山、東横山の発電所が建設されました。昭和三十九年に完成した多目的の横山ダムにより、西横山ダム発電所は廃止され、諸集落は移転を余儀なくされました。



東横山発電所杉原第2沈砂地

太古の揖斐谷

揖斐谷のルーツは今からおよそ数千年前。東横山下平や東杉原小曾根の遺跡から、縄文

時代には既に人が居住していたことが明らかにされています。

下平、小曾根の遺跡とともに揖斐川河畔の小段丘に位置し、南向きで日当たりもよく洪水の危険もないことから、縄文人が居住地として選ぶ自然条件を備えていました。

遺跡散布地は、標高一九〇mから二四〇mに及ぶ緩斜地で、揖斐川本流寄りの一帯。峽谷地形の多い藤橋村以南には遺跡が極めて少く、また同じ美濃山地に比べると遺跡の分布密度が少ないこと、平坦面や緩斜面の極めて乏しい揖斐谷地域が、狩猟や採集を生活手段とした縄文人にとっても、決して好適な居住地にはなりえず、縄文時代においても過疎地域であったと推測されています。



寛政七年東横山絵図

近代に至るまでの支配機構と交通路

縄文時代以降古代までは、現存する史料もなくその歴史的な道のりは不明ですが、中世になると記録や伝承が表れはじめ、東横山の中嶋氏、東杉原の杉原氏、鶴見の宮川氏など、豪族を中心とする村々が発達し、段丘やこれに続く緩斜面で農耕を営む山村が形成されました。

この揖斐谷に沿ってつくられた道路は、紆余曲折を繰り返して、峠を越え、支流を渡るなど難行の連続でした。従って平野部との往来は少なく、かえって分水嶺の峠を越えて近江や越前との交流が盛んであり、越前文化、近江文化、美濃文化が交錯して、言語をはじめ

家屋の様式に至るまで、特有の文化をつくりあげました。

天文十一年（一五四二）になると、越前朝倉義景が根尾谷、徳山谷から侵攻して、斉藤道三勢と杉原あたりで戦っていますが、この交通路が美濃越前間の通路として、軍事的にも重要であったことを示しています。近世以降には、尾張藩付属石河原、旗本青木知行、大垣藩戸田領と、その支配機構はすべて美濃平野部に属しますが、これも越前・近江を連絡する交通の要衝であったため、統治上の配慮がなされたもの。支配機構の確立により、下流との交流を目的に、両岸沿いの道路も整備されました。現在旧道は山道として残されている僅かなものを除くと、その面影をとどめていませんが、道幅四〜六尺で、その多くは峡谷壁の急斜面を避け現道路よりも高いところに位置していました。

木地師の活躍

森林資源が豊富な揖斐谷には、主として栃を原木として素木加工の膳・椀を細工する木地師が、中世以降入山していたと伝えられています。「大垣藩座右秘鑑」によれば、延宝



木地膳と碗

九年（一六八一）に木地挽九郎左衛門をはじめ七名の木地師が、揖斐谷にいたと記載されています。また東横山の中嶋氏の先祖は小倉莊義英で、木地師の始祖惟喬親王より木地挽きの免許を授けられて東横山村の北東にある権現山に住み、久しく木地師を営み、その居住地には富士並権現社を祀っていたとあり、その神社跡は今も山深いところに残されています。

数年から二〇年を越す稼業期間中彼らが歩き続けた山道は、後世まで村民も利用してきたものであり、その意味からも木地師たちは山地開拓者であったと言えます。

江戸時代に入り幕藩体制が整備されると、山は百姓持林（居林ともよばれ、個人所有の山）と、共有林とみられる参會山に区分されている）と藩有林に大きく分けられました。

森林が大部分を締める揖斐谷では、個人所有の居林は少なく、そのほとんどは共有林。この百姓持林は薪の採取や屋根葺きに使われる茅採取地の刈場や草地でした。一部の個人所有の山では、樹木の無断伐採は一切を禁止され、代官御役所へ願ひ出て許可を受けるだけではなく、冥加金納入の必要があり、乱伐による林野の荒廃を厳しく規制していました。

また各領主が所有する御林山では、御林山縮まり役から炭山への私下がありました。生産性が極めて低いこの地域では、炭焼きの際に納入される領主への運上金は大きな魅力。御林山縮まり役の政策もあり、炭焼きが順次盛んになっていきました。

一方段木刈りも多額の運上金を生み出す大切な資源。揖斐谷の山林で伐採された用材や薪用の木材は筏に組んで揖斐川を流送し、段木と称して管流して下流へ流送、物資輸送に従事する歩荷や取引商人が往来し、商業も次第に栄えていきました。

山林制度と段木の流送

藤橋村の誕生



分村最後の久瀬村役場

明治維新の廢藩置縣が実施されると美濃国一円は岐阜県として統一され、この地域は明治三〇年、久瀬村に一括されました。その後大正十一年には分村し、藤橋村が誕生しました。分村による諸問題についてはその後順調な経過をたどりましたが、新村名については、それぞれの提案があり最後まで紛糾、当時の村長はやむなく「藤橋村」と命名。以後揖斐谷においては、電源開発が度々行われ、その都度工事人員の流入による人口の急増と水没による急減が繰り返されました。特に昭和三十九年に竣工した横山ダムにより川尻、親、鬼姫生の集落が湖底に姿を消し、今また徳山ダム、杉原ダム計画によって東杉原、鶴見の二つの集落が集団移転をし、昭和六二年四月には徳山村を藤橋村に編入しています。過疎化が進む新村の前途は決して楽観を許されません。しかしその反面ダム湖を利用した観光開発が盛んになり、周辺一帯を観光地とする計画も着々と進められています。

藤橋村・満州開拓者の手記

昭和十四年、政府の富国政策に基づき満州開拓団が募集され、藤橋村からも六家族が満州に移住。私たちは、第八次開拓団・北安省農城興華開拓団に加えられ、現地では、二〇町歩の土地が与えられました。しかし外地のことゆえ、男子は匪賊討伐に参加せねばならず、そのために負傷者や死者も出ました。考えると、開拓団についてもよい北方警備隊だったのです。

こうした厳しい状況の中で、私たちは建設と増産に励み、上司から厳しい供出割当命令に答えようとして、お国のために「生懸命努力しました。その苦しさは耐えかねて内地に帰る家族も増えていきましたが、六年も過ぎた頃、米・大豆・小豆などが順調に採取でき、特に西瓜・南瓜などは実に見事なものでした。ところが戦争の火の手はますます激しくなるばかり。入植者へも召集令状が来るようになり、昭和二〇年八月、ついにソ連との戦が始まりました。こうした不安な生活を送っているうちに、退避命令がくだされ、疎開を余儀なくされました。

終戦を迎え一旦は入植地へ戻りましたが、今度は暴動という火の手が襲いかかりました。私たちは収穫を目前にした作物や家財道具を二切捨て、最善の策を講じましたが、馬は男は丸裸、女、子供は上衣をはぎ取られ、すべての品物を奪われる始末。弱い人は次々と亡くなっていき、そんな中でも、ソ連の兵隊がボロの衣服を集めて配給してくれ、大きな黒パンを与えてくれたそのうれしさは、今なお忘れることができません。

そうした抑留生活を経て昭和二年のこと、やっと内地引揚げが許され、二〇日余りの船旅を経て、待ち望んだ懐かしい故郷の土を踏むことになりました。敗戦後の藤橋での暮らしは惨憺たるものでしたが、引揚げの苦労から見れば微々たるもの。しかしその忍耐も今とすれば、金銭では買えないのできないものだと思います。

そして苦しかった波瀾の生活、日本国の防壁となった開拓者、犠牲となった同胞のみなさん、生きて帰れた私は幸せであったと喜ぶとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

満州開拓団引揚記録 藤橋村村史より



横山ダム全景

中空重力構造の横山ダム

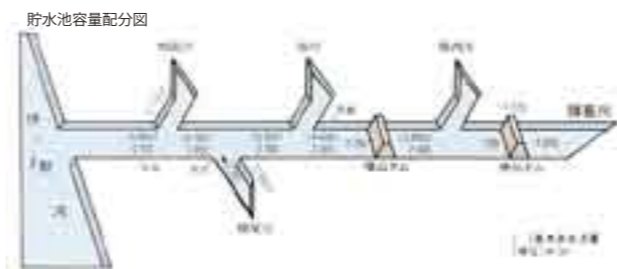
揖斐川は、木曾三川の中でも最も降水量の多い河川です。年平均の降水量は、日本の平均一七五〇mmを遙かに凌ぐ三、一〇〇mm(横山ダム地点)にも及びます。豊富な水量は流域の発展に大きく貢献する一方、洪水によって幾度となく災害をもたらしてきました。中でも昭和三四年に襲来した伊勢湾台風による惨状は、目を覆うばかりのもの。ダムによる洪水調節の必要性は切迫したものとなりました。そんな洪水から貴重な生命、財産を守り、豊富な水を有効に利用するため、建設省は昭和三四年からダムの工事に着手し、昭和三九年には揖斐川の河口から約八〇kmの地点に横山ダムが完成しました。

冠山より伊勢湾に注ぐ二二km

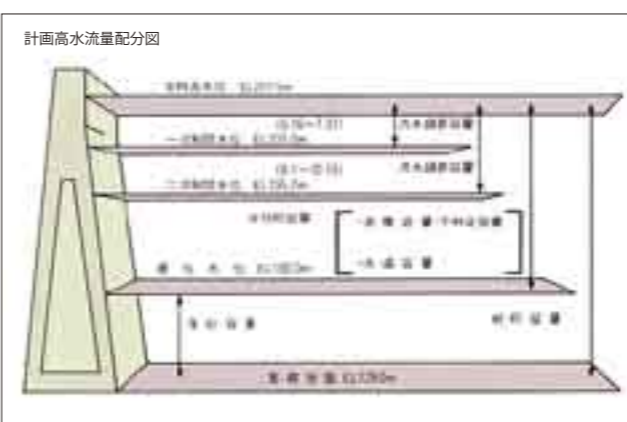
木曾三川の最も西に位置する揖斐川は、その源を岐阜県と福井県の県境の冠山に発し、根尾川(旧称・藪川)牧田川などを合わせて濃尾平野を南流。桑名市にて長良川を合流した後、伊勢湾へ注いでいます。その延長は、二二km、豊富な水量は流域の発展に寄与する一方で、大出水時には、生命や財産を脅かしてきました。山間部では洪水対策等として、ダム建設や砂防事業が推進されています。

横山ダムの特長は、世界でも大変珍しい中空重力構造です。中空重力とは、コンクリートダムの中に空間をつくり、コンクリートなどの材料を節約する構造です。

昭和五〇年八月に襲来した台風八号は、揖斐川流域で昭和三四年の伊勢湾台風を上回る豪雨でした。



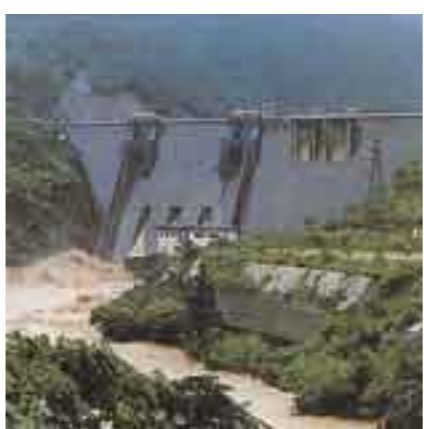
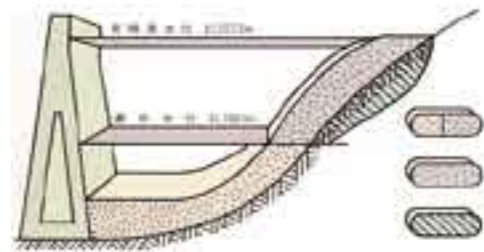
横山ダムは、治水機能を発揮し、洪水による被害を軽減させています。治水とともに、農業用水として西濃地方の田園に送られ、農作物の成長に合わせ使われるとともに、最大毎秒一二九mの水により最大七万kW(二万四千世帯の使用電力量)の発電を行っています。



再開発に挑む横山ダム

ダムを計画するときには、出水などに伴い、集水区域から水と一緒に流れ込む土砂の堆砂を想定し、ダム機能に支障がないよう容量を確保することになっています。

横山ダムは、近年の度重なる出水などにより堆砂が著しく進み、このまま放置すればダム機能に支障を与える恐れがあり、建設省横山ダム工事事務所により再開発事業が行われています。再開発事業は、堆積土砂を浚渫船で湖底から直接掘削することと、新たにダム湖の直上流に排砂堤を造り、土砂を排砂トンネルにより下流に流すことにより、堆砂の軽減を図るものです。



総貯水容量第一位 堤高第三位 日本が誇る徳山ダム

徳山ダムの事業目的

徳山ダムは揖斐川上流の岐阜県揖斐郡藤橋村に建設する多目的ダム。

- 洪水調節
ダム地点の計画高水流量毎秒一、九二〇mのうち、毎秒一、七二〇mの洪水調節を行う。
- 流水の正常な機能の維持
揖斐川の既得用水の補給など、流水の正常な機能の維持と増進を図る。
- 利水
都市用水(毎秒最大一五m)を供給する。
- 水力発電
ダム建設と合わせて、徳山発電所と杉原発電所が建設され、それぞれ最大出力四〇万kW(キロワット)と二万四千kWの発電を行う。

ダムの規模と構造

ダムの型式はロックフィルダムで、貯水量はわが国第一位、堤高は第三位の大ダム。

順位	ダム名	河川名	県名	形式	総貯水容量(千m ³)	完成・建設中	事業者名
1	徳山	揖斐川	岐阜	ロック	660,000	建設中	水公団
2	奥只見	只見川	福島	重力	601,000	完成	電源開発
3	田子倉	只見川	福島	重力	494,000	完成	電源開発
4	御母衣	大白川	岐阜	ロック	370,000	完成	電源開発
5	九頭竜	九頭竜川	福井	ロック	353,000	完成	電源開発

順位	ダム名	河川名	県名	形式	堤高(m)	完成・建設中	事業者名
1	黒部	黒部川	富山	アーチ	186	完成	関西電力
2	高瀬	高瀬川	長野	ロック	176	完成	東京電力
3	徳山	揖斐川	岐阜	ロック	161	建設中	水公団
4	奈良原	橋俣川	群馬	ロック	158	完成	水公団
5	奥只見	只見川	福島	重力	157	完成	電源開発

計画の現況

徳山ダムの建設にともない、徳山村の全住民は村外に移転することになったため、集団移転地として五地区を計画し宅地造成を行なっていました。また、ダム建設工事に使われる大型重機(ブルドーザーやダンプトラック等)を搬入するため、国道や県道の改良工事を行っています。また、ダムサイト上流の水没する国道等の付替工事を行っています。



大規模な崩壊地・徳山白谷

揖斐川流域の標高七〇〇m～一、五〇〇mには、三カ所「徳山白谷」「根尾白谷」「ナノ谷」の大規模崩壊地があり、いずれも大規模な崩壊土が残存し、流域荒廃の二因をなしています。徳山白谷の大規模崩壊地は、昭和四〇年(一九六五)九月十三日から十五日にかけた台風二四号に刺激された前線の集中豪雨により、地すべり性大崩壊が発生、一八三万m³(横山ダムの体積・三二万m³の五、七倍)にも及ぶ巨大な岩体が、約二〇〇mすべり落ち白谷をせき止め、上流側には、約三〇〇mのせき止め湖が発生しました。この崩壊は、風化の著しい斜面に大量の雨水が浸透したこと、河川の洗掘によって発生したといわれています。こうした土砂による下流域での災害発生を防止するよう建設省は、昭和四三年に越美山系砂防工事事務所を設置し、揖斐川上流域で直轄砂防事業に着手。荒廃渓流対策、土石流危険渓流対策等の事業を推進しています。





揖斐渓谷

雪深き山里は、 時を置き去りにした 昔がたりの里。

しんと降り積もる粉雪。
真綿のような雪は、谷も、里も、田畑さえも、
純白のじゅうたんを敷きつめていく。
白く清らかな妖精たちは、さながら天空を翔る使者。
時を置き去りにした山里に、
昔がたりの世界を紡ぎあげていく。

雪国の旅のプロローグ

雪けむりを上げて走る除雪車。音もなく降りかかる粉雪は、谷も里も白き世界に埋め尽くし、辺り一面は銀世界。まるで時間の壁を逆流するように、雪のトンネルをくぐり抜けると、そこは雪と溪流と昔がたりのふる里。冬の旅物語の序章は、こうして静かに幕をあけました。

大垣インターチェンジで名神高速道路を降り、国道四一七号から三〇三号へ車の針路を変えると、奥美濃の国・藤橋村はもう目前です。梢に絡みつく樹氷は、自然が刻み込んだ樹木と氷の彫刻。国道沿いに続く樹水のオブジェを眺めながら、ステアリングを合わせていると、深い碧の水面をたたえる横山ダムの湖が見えてきました。

渇水期の秋から冬へかけては、ダムの底に沈んだ村が見えてくると言われるように、ダム湖に立ち尽くす蠟燭のような枯木…。

湖底にはかつてこの村に暮らした人々の思い出まで、すっかり沈み込んでいます。うか。幾重にも重なる白い山脈は、そんな思

いを知ってか知らずか、湖面にまぼゆいまでの白さを映しだしてました。



水没する徳山集落

囲炉裏で語り継がれる 昔がたりの世界

急峻な山々と溪谷が織りなす藤橋村は、かつて炭焼きの煙りがたなびいた典型的な山村。山の恵みを生業に、川の幸をその日の糧に、

を下ろしています。

妻人の民家に一歩足を踏みいれると、そこは時計を逆回したような、懐かしい日本の風景。紙漉き、栃の木挽き、石臼、織機など、しっかりと磨き込まれ黒光りした民具の数々は、今にも動き出しそうな情熱をうな表情で、訪れるものに語りかけてきます。

遠い遠い昔、紙を漉き、石臼を挽いた揖斐谷の祖たち。髪のはれたお歯黒の老婆が、白髪頭に半纏を纏った好々爺が、この地にひっそりと生きていたという記憶。民具のひとつひとつにしみついた年輪は、ひよとしたり、諸人の知恵、しきたりを言わずもがなに伝えようとしているのかも知れません。そんなことをかぎとることができたら、そっと触れた鴨居はことのほか暖かく、翁たちのつぶやきが聞こえてくるような、そんな錯覚に囚われるから不思議なものです。

水没する村を 見守る徳山城跡

歴史民俗資料館から国道四一七号をさらに北へ。木郷集落の北に連なる山脈の南に突出したる山の尾の上に徳山城跡が残されています。若むした石碑には「徳山城跡」という刻文字。その石碑をまるで敵から庇うかのように、杉の古木が天に向かってそそり立っています。東西南北に大きく枝を広げる姿は、天空にまで睨みをきかせる仁王のよう。今はただ雪深き山の頂きも、かつては覇権を争ったひのき舞台であったのかもしれない。

そういえば、この地を支配した徳山氏は徳山谷の旧族で、家伝によれば坂上田村麻呂の出自とか。千有余年の昔、杉や檜が生い茂る千古の森で、一体この地に何が起きたのでしょうか。



歴史民俗資料館

こととしたましよう。

遠い昔のことです。西杉原の東はずれにある金山淵は、この辺りで一番深い淵なので村人からたいそう恐れられていました。

この赤池にもいろいろな言い伝えがあります。ある人が、わらを打つ「横つち」を赤池で落としたら、しばらくして金山淵にぽつかりと浮かび上がったとか。この赤池と金山淵

は、底が通じている。いや龍宮まで通じている深い池だとも言われていました。その後、この赤池も洪水や山崩れなどで沼地が浅くなったので、理め立てて田畑にしようということになり、村人は一斉に石や土を投げ入れました。

ところがどれだけ入れても、「ゴボツゴボツ」と泡を出しても、沈んでいくばかり。材木や柴木を入れても、やっぱり「ゴボツゴボツ」と、呑み込むように沈んでいくばかりです。気味が悪くなった村人は「この池はやっぱり底なし沼だ」「こんなに埋めたんではたたりがあるかも知れん」と、早速お坊さんを頼んで供養してもらい、この赤池のほとりに穴を掘り、お経千巻と菅笠を千蓋埋めて、丁寧にまもりをしました。これを村人は経塚とよんでいます。今でもこの経塚を掘り起こすと、西杉原に災難がおこると伝えられています。

南北朝の面影を 今に伝える藤橋城

経塚伝説が残る西杉原集落は、中世から近世にかけて城館、城砦が吃立し、杉原砦が築かれていました。



藤橋城

スター・フェスティバル

8月第3土曜日

藤橋村の星空の美しさは全国でも第三位（平成四年度・環境庁調査より）。毎年夏休みになると、藤橋城公園でスター・フェスティバルが開催されています。イベントの内容は盛りだくさん。星空音楽会や天文クイズ、天体写真展、大きな望遠鏡を使つての星座案内など、ファミリーにもカップルにも大好評です。



藤橋城公園



藤崎村への交通

●公共交通機関利用●

名鉄/名古屋・岐阜方面から
名古屋 名鉄30分 → 岐阜駅 名鉄40分 → 本揖斐
バス40分 → 藤橋村

●マイカー利用●

大垣・岐阜 60分 → 横山ダム
横山ダム 20分 → 藤橋城

岐阜県揖斐郡藤橋村

▼村の木/ケヤキ



村章

村章の由来は、山林を主体にして大きく発展する村と、安定した力を三角形で、ダムと揖斐の清流を「フ」によって象徴し、二つの組み合わせによって村民の融和と団結を表現したものです。

綴る人もなく、語る言葉もなく、ただ今は石碑がひっそりとたたずむばかり。やがてはダムの底に沈みゆく徳山の村々を、静かに見守っていました。



徳山城跡

苦難を極めた

油島締切と 大樽川洗堰。



木曾川・逆川御普請所墨引絵図 個人蔵

木曾三川の分流を最大の目的とした宝暦治水。しかし当時の土木技術では、着工当初でさえ工事計画が決定できず、木曾三川の水利状況や工事の進捗状況を判断しながら、逐次決定されていきました。今回は、油島締切工事と大樽川の洗堰工事の特集。その苦闘の道のりを追跡します。

四つぎ、八つぎ、十二つぎ。

江戸時代に至るまで、木曾三川下流域は水害常習地帯。洪水が頻発する最大の理由は、木曾三川が下流域で合流していたことが挙げられます。

つまり揖斐川と長良川は中須川、中村川、大樽川で、木曾川と長良川は逆川によってそれぞれが結ばれており、さらに長良川は中島郡小藪村(現羽島市)地先で木曾川と合流し、その後南流して桑名郡油島新田(現海津町)地先で揖斐川も合流し、長島輪中北端で再び分流、長島輪中を挟んで流下し伊勢湾に注いでいました。

木曾三川の河床は揖斐川が最も低く、長良・木曾川の順に高くなっているため、平時でも木曾の水は長良へ、長良の水は揖斐へと流れ込んでいました。

加えて日本の天候は、雨足が西から東へ移動する傾向にあり、一旦雨が降れば、いちばん西にある揖斐川が氾濫し、続いて長良川、木曾川の順に出水します。

この現象を地元では古くから、「四つぎ、八つぎ、十二つぎ」と伝承。つまり雨が降り始めてから四刻(八時間)たつと揖斐川、八刻(十六時間)たつと長良川、十二刻(二十四時間)たつと木曾川が出水し、木曾・長良の水が流れ込む揖斐川下流域では、長時間洪水



大樽川締切油嶋地先喰違堰御普請益村障村色分絵図 岐阜県歴史資料館蔵

に悩まされてきました。江戸幕府はこうした水害の解決策として、宝暦三年(一七五三)、三川分流を目的とした宝暦治水を実施しました。

第二期工事の治水計画

輪中堤等の緊急復旧や修繕工事の第一期工



文政年間油嶋喰違堰絵図 長谷川千代子氏蔵

事の進捗にともなう水行の状況も考慮して多少計画を縮小することになり、油島側新堤防の猿尾と馬踏の長さ減じ、松の木側元付け堤の長さを減じて、下埋めに着手してから約半年余り、予想外の好天と薩摩藩士の努力により、四月初旬の竣工予定が三月二十七日までに油島・松の木とも完成をみるに至っています。

大樽川洗堰工事

宝暦治水における第二の難工事は大樽川の洗堰築造。それまで大樽川の河床は長良川のそれより低かったため、長良川の洪水が流入、沿岸の堤防を破壊し、多大な被害を与えていました。これらの治水対策として、寛延四年(一七五二)に自普請(地元)の村による普請で喰違堰をつくり、長良川からの流入を制限するとともに水勢の緩和を図りましたが、水害の根絶には至りませんでした。

そこで宝暦治水では、前の喰違堰より下流一四八間(約二七〇m)の地点に長さ九八間の堤防を計画しましたが、締切堤にするか或いは洗堰にするかは、油島締切工事に応じ、水行の状況を判断してから決定するというところで、「いずれに決まっても手戻りがなく支障のないように」と十一月半ばから下埋工事に着手、十二月中に下埋が完成しています。一方油島締切工事も進み、その結果による水勢の変化から、「締切本堤にすれば洪水の際に維持が難しく、破堤の恐れがある」と判断され、翌年の正月二十七日、出水二合(四尺一・二m)まで堰止め得る洗堰をつくること

れ、具体的な実施計画は工事期間中実情に即して、決定されました。

油島締切工事

寛延元年(一七四八)に実施された御手伝普請では、油島新田地先から猿尾・水別ね一七〇間(約一三〇m)、下流側松之木地先から杭出水制一三〇間(約五〇m)を突き出して水勢の緩和を図りましたがさした効果も得



水行奉行高木新兵衛所持の扇子(表)個人蔵

基礎を造りあげていったといわれています。この締切堤防は、平均高さ二間(三・六m)、馬踏(堤防の頂上部)二間(三・六m)、敷(堤防の底辺)十間(二・八m)で、これを保護するため堤脚の両側を径一尺、長さ九間の蛇籠で覆い、その外側に深さ七尺、横六間二尺の枠を沈める工法でした。

工事にかかるおびただしい資材の調達は近隣区域だけでは賄えず、しかも価格高騰にも及び、苦難を極めたと伝えられています。さて、懸案の締切りか否かの決定がくだされたのは宝暦五年正月のこと。結局締切は危険と判断され、締切堤防中央に三〇〇間(約五四〇m)の開口部を設けることに。その後



大樽川洗堰絵図 長谷川千代子氏蔵

シリーズ

宝暦治水の

あらまし

うことが、正式決定されました。この洗堰は長さ九八間(下埋の長さ九八間、幅五間)で、さらに上流側に幅三間の保護工をつけ、下流側に幅五間の水叩き三段計十五間をつくり、全体の堰幅二二間を蛇籠で被覆したもので、三月二十八日には全工事が完了しています。この洗堰は全体を石で覆った巨大な堤防。これにより、平常は大樽川へは水は流れないものの、出水二合以上は長良川の水が大樽川へ流入するという当初の目的を実現していましたが、当時の背景から考えると、かなり高度の技術が集約されたと考えられます。

- 宝暦治水はわが国治水史上最大の難事業。宝暦三年(一七五三)十二月二十五日、幕府は薩摩藩に御手伝普請を命じ、総奉行公平田朝負をはじめ九四七名の藩士により、翌年二月二十七日、工事に着手。工区域は木曾三川下流域ほぼ全域に及ぶもの。修繕工事、復旧工事と中心課題の木曾三川分流のため、逆川洗堰締切工事、大樽川洗堰工事、油島新田締切工事が実施された。同五年五月二日に工事は竣工。木曾三川の完全分流には至らなかったが、明治以降の近代治水の先駆と評価されている。

- ◎第一編 VOL. 8 宝暦治水の概念
- ◎第二編 VOL. 9 工事の歴史の評価
- ◎第三編 VOL. 10 宝暦治水の功労者たち
- ◎第四編 VOL. 11 今に残される工事跡

宝暦治水の歴史評価

安藤萬壽男氏が語る宝暦治水

安藤萬壽男

プロフィール
愛知大学名誉教授、愛知産業大学総長
文部省学術審議委員会委員、経済地理学会評議員、愛知県自然環境保全審議会会長、愛知県都市計画審議会委員等。多年にわたる経済地理学等の実証的研究や大学教育の発展充実などの貢献が高く評価され平成五年「勲三等瑞宝章」を受賞。輪中—その形成と推移—など輪中に関する著書、論文多数。



記の二工事など)の他に、水門の伏替や修理の工事(杵樋普請)と田畑切上掘工事(これは後述)とが含まれています。

宝暦治水工事が実施された地域は木曾川とその分流佐屋川(現在は廃川)の右岸以西で、現在の羽島市、墨俣町、養老町を結ぶ線以南の広い範囲であり、その中には平地だけではなく、養老山地での砂防工事も含まれています。しかしこの歴史評価は先に述べた油島締切と大樽川洗堰の二工事を中心に記述することになります。

治水工事の方法

この地方の治水を管理していたのは現在の羽島郡笠松町に役所があった美濃郡代(幕府役人)と、現在の養老郡上石津町多良に邸があった高木氏(西・東・北の三家)でしたが、この郡代の下に「堤方役」とよばれた治水の実務者であり技術者でもあった専門家が十人世襲で勤務していました。この人々は現地の事情に詳しく、治水工事を企画・指導してきました。これらの人々の豊富な経験は宝暦治水に当たった文書でも十分窺い知ることができます。

ところでこの当時、河川工事で行われた工事内容は大きく二つに分類できます。その第一は洲浚えや切開き、さらには河川敷

の中に開かれた新田の撤去などによって水行をよくすることで、これは宝永元年(一七〇四)以来の「大取払」でも知られております。

その第二は堤防が破堤しないように、堤防に上置したり、腹付したりして堤防を強化し、さらには猿尾を堤防から川の中に築きだして、堤防に濁流が衝突せず、対岸方向に流れを誘導する施設を作っております。

このように宝暦治水工事に当たってはそれまでの貴重な経験を生かして企画されており。しかし、それはこれまでの経験の上になつての定性的なものであって、洪水量などを十分測定した上での定量的なものではありません。従って、それまでに経験したことのない三川分流工事に当たっては自信をもった企画ができません。このことが幕府当局が最後まで、締切りの方法に迷つた理由といえます。

この当時の技術では油島で完全に締切をしようとするれば、それは工事技術としては出来たと考えます。しかし締切後の河況の予測ができなかったため、ひとまず、中間で締切らない部分を残してその後の様子を見ることがしましたが、結局、明治まで完全な締切はありませんでした。

ところで、治水工事の現場の労働には地元の農民を使うように幕府は指示しております。これには被弊した農民を救う目的もあったと思います。事実、この後の宝暦七年の幕府負担のこの地方の治水工事では「御普請第二々々御救之儀候」と指示しています。しかし、締切工事などの現場の工事には技術的に農民だけでは十分で、薩摩藩側は再三幕府側と交渉して、締切工事などには土木技術をもつ江戸や駿府の町人の「外受負」にしております。

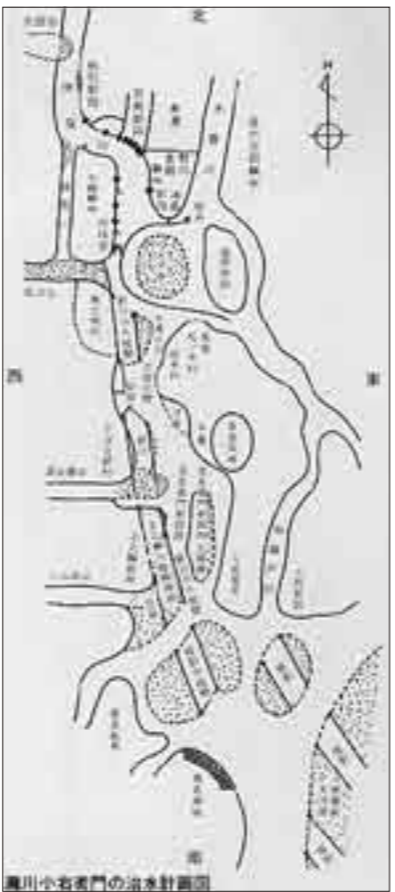
この頃までの「御手伝普請」では幕府側の指揮監督の下で、受命した藩から多数の藩士が現地に長期宿泊し、現地の労働者を指揮して、工事を行います。しかし、これらの藩士たちが特に現地の治水状況に詳しくはなはいません。この点からも宝暦治水工事における薩摩藩の苦勞があったと考えます。このように御手伝による

宝暦治水工事とは

薩摩藩が受命した御手伝普請による宝暦治水工事は油島締切と大樽川洗堰の二工事だけでなく、その内容は大変な広範囲に亘るものでした。この治水工事は二年に及び、その第一期はこの地域にて毎年春に地元で実施していた治水関係の補修工事(定式普請)と前年宝暦三年八月の大洪水の水害復旧工事(急破普請)の二種が含まれ、次の第二期には水害を根本的に除くための新規工事(水行普請)(上



中部地建「木曾三川—その流域と河川技術」、1988,P.329による。



松原義展「本阿弥輪中」二宮書店、1977,P.109による。(原図の不明瞭部分はカット)。

幕藩体制下の制約

この地方の江戸時代の所領をみると、木曾川左岸は大藩であった尾張藩が一括領有されており、美濃郡代の治水管轄区域外であつて、尾張藩とは治水上の協議をするだけでした。これに対し、美濃国はその領有が幕領、旗本領、尾張藩領、大小の大名領に分かれており、治水政策を実施するには難しい領有関係がありました。

このような所領の状況下で、この地方は江戸時代の初期以来、新田開発が進められ、それまで遊水地の役割を果していた後背低湿地に堤防を築き、洪水が入らないようにして新旧かけまわしていきました。この時、懸堤で囲まれた処が「輪中」であります(上図参照)。輪中の形成は濃尾平野の自然堤防地域や三角洲部では、ほぼ宝暦治水以前に終わっております。このため洪水は限られた本川を中心に流れることになり、その本川には上流からの土砂が堆積し、河床が高くなり、土砂が流入しなくなった輪中の内部と比べると、相対的な高度差が大きくなりました。この状況下で水害を防ぐには本川の堤防を輪中内に後退(引堤)させ、本川の河川敷を拡幅する必要があり。これは誰でも考へてく論理である



安藤萬壽男「輪中—その形成と推移」大明堂、1988,P.19による。

治水工事の指揮系統には無駄な点があったといえます。この点を幕府側も反省したと見え、明和三年(一七六六)から一部を、そして天明三年(一七八三)からは全面的に「普請金御手伝」すなわち、受命の藩は工事費を負担するが、工事そのものは幕府の直轄工事とするこに変わっております。

の輪中内に排水路(江川)を新設することやこの南部の低湿地に堀田を造成することこの地の村々を納得させ、その排水路や堀田の造成工事でも薩摩藩が担当しています。そして、この排水路や堀田の造成によって減少した土地の補償の米を、受益の村々から拠出する約束もしております。

このように、封建制度のもとで、三川分流工事を実施するには難しい問題がありました。上述の他にも、木曾三川の流域全体を通じた治山・治水の体系ができていなくて、土砂流出を増大したこともあげられます。これは明治以降に解決されてきつたあります。

BOOK LAND

輪中—その形成と推移—
著者 安藤萬壽男
発行 大明堂 定価 3,800円



輪中がどのように誕生し、推移して今日に至ったのか。輪中地域全域の輪中形成過程を総合的体系的に明らかにした一冊。第一部では、その形成や進展にまつる従来の俗説を検討・批判しつつ、総論的モデル的に分析。第二部では、輪中の全てについて、その形成・推移を分析し、最後に要約しています。輪中の集大成ともいえる本書は、輪中の中で生をうけた筆者の生涯のテーマを結実した名著です。

民話の小箱

たろべの滝

藤橋村・西横山

むかし、むかしのお話です。

藤橋村から板内村へ行く人々は、もっぱら西横山の「くろがね峠」を越えていきました。切り立った崖に沿いながら、曲がりくねったその道は、時折り、猪や狐が出没する獣道。

昼なお薄暗く、悪魔がでてくるような、あやしげな妖気が漂っていました。そんな獣道にも、清々しい滝が美しい飛沫をあげて流れ落ちていきます。たろべの滝です。

この滝は、村人や旅人たちにとって大切なくつろぎの場所。

炭や薪を背負い、歩き疲れた村人たちは、

急な崖をおりて、美しい滝の水を口に含むと、

体の芯から元気がみなぎってくるから不思議なものです。

日照り続きのある夏の日のことです。

ひとりの炭焼きが、いつものように滝のほとりて休んでいると、

一匹の河童が、滝壺の中から突然現れました。

「この村の稗も粟も日照りですっかりやらられ、幾日もなんにも食べていません。

どうかその瓜を一切れ、分けてください」と、今にも泣かんばかりに頼むのです。

食べることも事欠いていたのは、村人だけではなく、

たろべの滝に住む河童も同じこと。

痩せきった河童を可哀想に思った炭焼きは、

「わかった。この瓜を一切れ恵んでやろう。」

しかしこの瓜は私にとっても、残りの一切れ。これを恵んでやる代わり、

おまえもこの美しい滝の水を永遠に絶やさないことを、

私に約束してくれないか」と河童に言いました。

「約束します、約束します。この滝の水を永久に絶やさないことを約束します」

瓜をもらった河童は、うれしそうに滝壺奥深くに消えていきました。

その夏の日から、たろべの美しい滝は決して絶えることがありません。

まろやかで清々しいその水は、町の茶人にも愛されて、

水を汲みにくる風流人もあとを絶ちません。



木曾川文庫利用案内

編集後記

新年明けましておめでとうございます。

日頃のご愛読に感謝し、さらに充実した内容がお届けできますよう、編集スタッフ一同頑張ります。本年もよろしく願い申し上げます。

昨年12月9日、デレークとともに明治改修を指導したオランダ人工師・エッセルのお孫さんDr.ハンス・エッセルが、小説「乱流」の著者三宅雅子先生ご一行と、木曾川文庫を訪問されました。

Vol.9の編集にあたっては、藤橋村役場の皆様に大変お世話になり、ありがとうございました。

今回は犬山市を特集。宝曆治水のコーナーではその功労者たちを紹介します。期待ください。

(表紙写真 右：太郎兵衛の滝
左：雪の藤橋城
左下：歴史民俗資料館)



《開館時間》 午前9時～午後4時30分

《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》 無料

《交通機関》 国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島ICから車で約30分
東名阪長島ICから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平開門管理所・
木曾川文庫
〒496 愛知県海部郡
立田村福原
TEL(0567)24-6233

